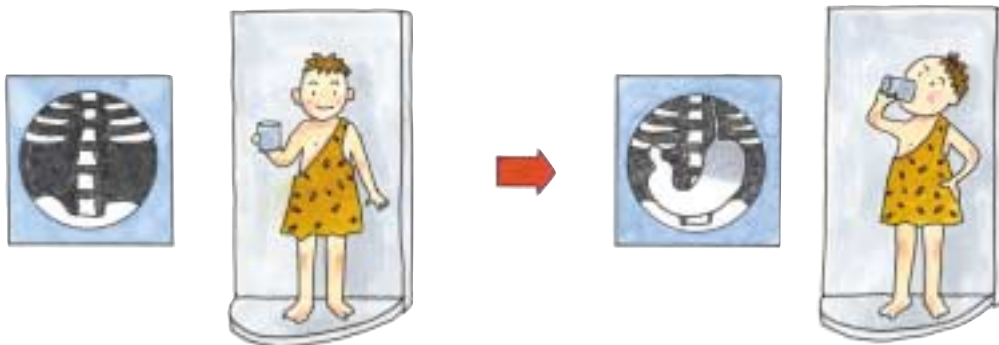


3. 胃や腸のバリウムを使う消化管の検査

消化管の検査には胃と大腸の検査があります。胃や大腸は、骨のようにX線写真には写らないので、X線写真によく写るバリウムを胃や大腸の内側に付着させてから、写真を撮影します。

胃の検査

みなさんが、胃の検査と聞いて思い浮かべることは、バリウムは飲みずらくて、発泡剤はすっぱくて、左右が分からなくなるほどグルグル回転して、逆さまにされて、ゲップを我慢してと、大変なことばかりだと思います。でも、それには色々理由があるのです。



① バリウム

最初にも説明しましたが、胃をX線写真に写るように飲んでいただくものです。飲みずらいとは思いますが、近頃のバリウムはサラサラして量も少なめなのです。

② 発泡剤とゲップ

発泡剤は水といっしょになると空気を発生させます。だから、胃が膨れてゲップが出やすくなります。なぜ、膨らませるかということ、胃の中には、ひだがあってそれを伸ばして良く見るためと写真にコントラストを付けるためです。ゲップをしてしまうと、胃がしぼんでしまって小さな病気が隠れてしまったり、良い写真が撮影できなくなったりします。大変でも、ゲップが出そうになったら、なまつぶを飲み込んでがまんして下さい。

③ 逆さま

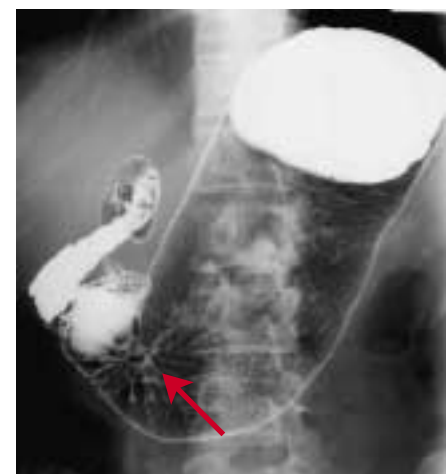
ゲップをがまんしながらの、逆さまは大変です。しかし、この体位でなくてはどうしても撮影できない部位があります。それは、胃の前側、『前壁』といいます。落ちないように、しっかり手すりを握って下さい。

④ 回転

バリウムを胃の全体にまんべんなく付着させるために回転してもらいます。そして、反対方向に回転してしまうと、バリウムが小腸に流れ出てしまい、それが胃と重なってしまうのできれいな胃の写真が撮れなくなってしまいます。あわてないで、技師の話をよく聞いて下さい。



透視撮影装置



胃ガンの写真

注腸検査

注腸検査というのはお尻からバリウムと空気を入れて大腸の病変の有無を見る検査です。

方法は、まずおしりからバリウムを入れたあとに空気を入れていきます。大腸の長さは通常の方で1.2～1.3メートルあります。体位変換によりバリウムを大腸の一番奥、つまり大腸と小腸のつなぎ目まで運びます。そのときにお腹が張ってきますが、リラックスして下さい。次にバリウムを大腸によく付着させ撮影していきます。人によって違いますが検査時間は20～30分ぐらいです。

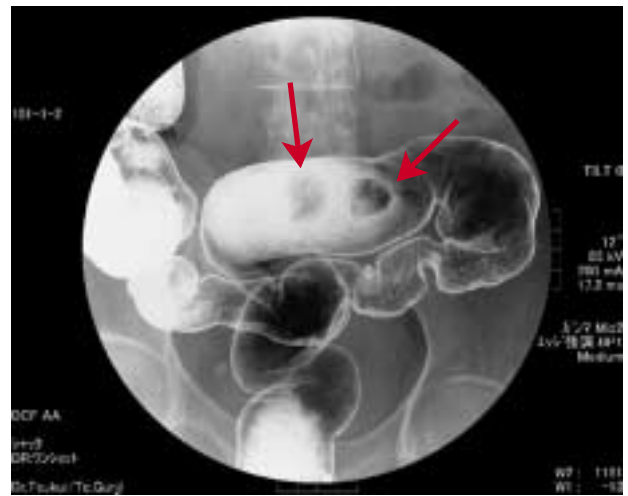
そして、注腸検査の場合一番重要なのが前処置です。それは大腸の中を空にして便をなくすということです。そのため食事制限と下剤を服用をしてもらうのですがトイレに5～10回以上行くことになるのでちょっと大変です。しかし、これをきちんとやっていただかないと、おなかに便が残り診断のさまたげになるので、病院の指示を守って下さい。また、注腸検査では検査による痛みなどはほとんど伴いませんので、安心して受けて下さい。



デジタル多目的透視装置



大腸ポリープ



前処置不良の残渣(便)

消化管の検査は、このようにみなさんのご協力があってからこそ良い検査が行えるのです。どれもこれも、大変なことばかりですが、より良い検査を行うために頑張ってください。